

議 事 録

会議名	寒川町史編集委員会		
日 時	令和7年12月17日(水)10:00～12:00	開催形態	公開
場 所	寒川町役場議会第1会議室		
出席者	委員：内海委員、松岡委員 事務局：伊藤館長、平尾主査、高木主任主事 傍聴者：1名		
議 題	(1)議事録承認委員の選出 (2)『寒川町史研究』第37号について (3)編集委員による座談会について (4)『寒川町史研究』の刊行計画について (5)その他		
決定事項	(1)議事録承認委員に松岡委員が選出された。 (2)構成案に対し、掲載順を入れ替えること、サブタイトルを活用することなどの意見が出された。 (3)座談会の開催時期を令和8年5月とし、元委員への依頼等は編集委員と調整しながら事務局が行うこととなった。 (4)町史研究の隔年刊行は了承されたが、刊行しない年に調査報告書が刊行できるか検討するため長期刊行計画を立てることとし、令和8年度の第2回会議で審議することになった。		
議 事	<p>(1) 議事録承認委員の選出 松岡委員が選出された。</p> <p>(2) 『寒川町史研究』第37号について 資料1について事務局案を説明したところ、次のような意見があった。 (委 員) 誌面構成を見たが、インタビュー記録をトップに据え、展示記録と順番を入れ替えてはどうか。戦後80年ということもあり、ここで戦時下の教育を明らかにし活字化することは大変意義があるためである。青年学校の先行研究は乏しく、中島良さんの記録は希少性が高いと思う。中島さんが青年学校に在籍したのはいつからいつまでか。 (事務局) 昭和16年3月に赴任し、青年学校が廃止される昭和23年3月まで在職している。 (委 員) 関連する写真はあるのか。</p>		

(事務局) 中島さん所蔵の写真が1枚あるほか、他の所蔵者の写真で青年学校の生徒が写っているものもあるので、掲載できるか検討したい。

(委員) 章立てや小見出しをしっかりと付けて、読者にわかりやすい構成にしてもらいたい。どのような構成を考えているか。

(事務局) まだ原稿が固まっていないが、章、節という大きな構成にはせず、話題の内容を整理して10個程度の小見出しを設けることになるかと思う。

(委員) 小見出しを巻頭に並べインデックスのようなものを載せると、読者にわかりやすくなるのではないか。また、サブタイトルはどうか。青年学校の持っていた意味が伝わるよう広がりをもったサブタイトルを考えてほしい。

(事務局) 検討する。

(委員) 展示記録の原稿について、構成はどう考えているか。

(事務局) これまでの展示記録を町史研究に載せてきたフォーマットがあるので、これに倣うことを原則とするが、併せて展示した学校日誌の翻刻もここで行う。

(委員) こちらのサブタイトルはどうするのか。

(事務局) 開催した展示のタイトルに手を加えるのはいかがなものか。

(委員) 展示したなかでポイントになるようなことをわかりやすく伝えるには、サブタイトルの活用が必要だ。

(委員) サブタイトルを付けることに賛成だ。どこの学校のことなのか、何年から何年までの記録なのかなどがわかるようにすれば、具体性を増すと思う。

(事務局) 執筆者に相談する。

(委員) 町史研究を町内ではどこに配布しているか。

(事務局) 小・中学校、高校の図書室、水道記念館、寒川神社などである。

(委員) 小・中学校でも高校でも、総合学習、探究学習などが盛んになっていて、地域の歴史に関する関心やニーズもあると思う。町史研究に載せる記事のそれぞれの末尾に、探究学習のための情報として文書館の資料が活用できると書き添えてあると、活用してもらいやすくなるのではないか。

(委員) 他県では廃校になった学校の資料を保存し活用する取り組みの事例がある。寒川でも学校記録の所在を明らかにし、先生方の教育活動に資するような方向性を検討してほしい。これまで先生方から文書館に、探究学習の素材を提供してほしいという要望が寄せられることはあったのか。

(事務局) 出前授業として地域のことを話に来てほしいという依頼はこの3年ぐらい続けてあるが、素材を提供してほしいという依頼は残念ながら受けていない。

(委員) 事業記録についてはどのような内容になる予定か。

(事務局) 町史編さん事業で、町内の資料所在調査を実施した。しかし調査自体の総括が行われていない。成果と課題を整理することが目的である。

(委員) 良い企画なのでぜひ進めていただきたい。その際、より良いサブタイトルを考えていただきたい。

(委員) 浜降祭に関する論考が他の雑誌に掲載された。これについては、元編集委員から寒川町史のこれまでの業績が反映されておらず内容的にいかがなものかという意見が寄せられた。今号で反論を書いていただくことも検討すべきと考えるが、時間の制約もあるので掲載は見送ることにしたい。ただ、年表稿のなかに、浜降祭の論文が掲載された事実を、論評を加えずに載せてはどうか。

(事務局) 年表稿は町の中で起きた出来事を記録として載せるもので、雑誌論文まで扱うべきものではないと考える。もしこの浜降祭の論考を年表の項目として挙げるなら、寒川に言及した書物や観光案内の雑誌記事などを網羅的に調査し全て載せないと説明がつかない。

(委員) これについては、事務局でもう少し協議したうえで、取り扱いは任せることにしたい。

(3) 編集委員による座談会について

資料2についてこれまでの経緯を説明したところ、次のような意見があった。

(委員) 予算のない中での座談会の開催は難しいということで、来年度の予算要求をしていただいたそうだが、見通しはどうか。

(事務局) 予算要求中としか回答できない。ところで、この座談会は年2回開催される町史編集委員会のうちの1回を座談会に充てるということで良いか。

(委員) その考え方でよい。出席をお願いする元委員には事務局から連絡をお願いしたい。時期としては暑いころは避けたいので、5月の連休明けから6月にかけてが望ましい。

(事務局) 日程は元委員に相談したところ、現委員のご都合を優先したうえで事務局に任せるというお話をいただいたので、調整していきたい。来年度のスケジュールで外してほしい曜日は決まっているか。

(委員) まだ決まっていないが、主役は元委員の先生方なので、皆さんの都合で決めていただきたい。

(事務局) 6月は議会対応があるので、開催は5月中としたい。まずは事務局から元委員の皆さんに企画の趣旨を記した依頼文を送付し、参加の可否を確認したうえで、日程調整を行うことでよろしいか。依頼文は編集委員長の名義で出す。

まず事務局で素案を作成し、内海委員長・松岡委員に確認していただいてから、1月中には送付することにした。

(委員) 会場はどうするか。

(事務局) 寒川での開催を検討している。

(4) 『寒川町史研究』の刊行計画について

資料3について事務局案を説明したところ、次のような意見があった。

(委員) この提案は今日決定したほうが良いのか、次回以降に持ち越しても大丈夫なのかを確認したい。

(委員) 現状における課題はすでにはっきりしているので、今日決めてしまって構わないと思う。

(委員) 資料3の項目の並べ方について。「課題」を先に記して、「提案内容」を後に置くべきと考える。また、「課題」の項にある「目的化」という表現が、他律的な要素が強く感じられるようで納得できない。事務局としては上から強制されるような意識を持たないでほしい。

(事務局) 上から強制されているという意識はなく、編さん事業を文書館の業務として位置付けて実施している。現在、町が公文書館を設置している意義が問われているため、公文書館の使命である公文書の収集・整理と、それに伴う例規の整備を最優先で進めるべきだと考えている。そのような状況下において、内容の充実した町史研究を刊行するため、隔年刊行という提案をさせていただいた。

(委員) 資料を地道に整理することはもちろん大事だが、相模海軍工廠をはじめとして、戦争関係資料など町として後世に残すための調査は行うべきで、動けるときに動かなければならない。しかし事務局としてその気概が見えない。今回の提案はペンディングでも構わないか。

(事務局) 町史研究をやめるという提案をしているわけではない。町民にとって意味のあるものを刊行するにはどうしたらよいかと考えての提案である。

(委員) 配付資料を見ると、隔年刊行に変えることが目的化しているように受けとれてしまう。まず課題を掲げ、課題解決の手段として隔年刊行があるよう作り直してほしい。

(事務局) 内容についてはご理解・ご賛同いただいていると捉えてよろしいか。その際、資料を再提出しなければ了としていただけないのか。あるいは、これはあくまで資料なので、刊行計画を立てるときにその点に留意せよというご意見として受けとめればよいのか。

(委員) 資料の作り方としては、現状を前面に出す構成のほうが良いと思う。刊行計画を作る際にそのようにしていただきたい。その際、業務が多くてリソースが割けないという理由をはっきり前面に出した方が良い。

(委員) 一番心配しているのは、隔年にする事で、予算がしっかり確保できるかだ。調査報告書は途中から庁内印刷になったし、町史研究についても庁内で印刷して出した例があるが、写真の印刷の出来栄が悪く、残念な結果になった。庁内印刷はやめてもらいたいが、今後、予算が付かなくなる恐れはないのか。町史研究を隔年にした場合、予算確保の意味でも調査報告書と交互に出すことが必要ではないか。しかしそのようになった場合、片方しか認められないようなことは起こりうるのか。

(事務局) 今のところ町史研究の印刷製本費として毎年予算化されている。今後の財政状況にも左右されるので一概には言えないが、仮に交互に刊行することになった場合でも、調査報告書の刊行意義が説明できれば、認められないことはないと思う。

(委員) 調査報告書と銘打たない方法もある。従来のスタイルの町史研究は隔年とし、合間の年は町史研究というタイトルのもと資料集を作る。これならば予算確保の面で安全ではないか。

(事務局) 隔年刊行を提案したのは、公文書等の業務に力を注ぐとともに、町史研究の内容も充実させるためであるが、毎年必ず何らかの印刷物を出すとすると、提案理由から逸れてしまう。必ず合間の年に報告書を刊行すると縛るのではなく、長期の刊行計画という大きなスパンで考えさせていただければと思う。

(委員) 報告書に関しては一から原稿を作成するのではなく、資料の写真をそのまま載せるなど、手間のかからない方法もある。貴重な資料を刊行物として伝える方法には工夫の余地がある。

(事務局) 元委員に事前に伺ったところ、町史研究は必ずしも毎年出す必要があるわけではないが、調査報告書は寒川神社日誌など刊行が途中で止まっている資料があるご指摘いただいた。ただそれは、隔年に必ずということではなく、長いスパンのなかで計画的に出していくことを考えていきたい。確認をさせていただくと、来年度第1回の編集委員会は座談会に充てるので、刊行計画をご検討いただくのは第2回会議ということによろしいか。

(委員) 第1回のおり、座談会前に早めに来て検討する方法もあるが、座談会を優先しなければならないので、第2回会議で検討することについて承知した。ところで、座談会を町史研究38号に載せる際、町史の事業に関する写真をたくさん載せるなど誌面作りの工夫が必要だ。37号に掲載予定だった「寒川町史編さん事業の収集資料について」の原稿についても、座談会と関連付けることができるので38号に移すことも考えてはどうか。

(事務局) 刊行スケジュール的にこの原稿を38号に移すことは厳しい。

(委員) これは要望なので、事務局で検討してほしい。

	<p>(5) その他</p> <p>次回の編集委員会は座談会とする。別途日程調整を行うことになった。</p>
資 料	<p>資料1 『寒川町史研究』第37号について</p> <p>資料2 編集委員による座談会について</p> <p>資料3 『寒川町史研究』の刊行計画について</p>
議事録承認委員及び 議事録確定年月日	<p>松 岡 俊</p> <p>(令和8年1月20日確定)</p>